

ポル・ポトのカンボジアからフィデル・カストロのキューバへ

ウンサー・マロム
編訳 岡田知子

——歴史は私に無罪を宣告するであろう

モンカダ兵営襲撃の写真が表紙を飾っている青みがかった灰色の本。哲学の授業で何度も開いた。毎年メーデーにはホセ・マルティ・メモリアルが全国から何千、何万人もの人で埋め尽くされる。背が高いフィデルは髭を整え、まるで俳優のようだ。オリーブ色の軍服に身を包み、低くはない聞き取りやすい声で演説する。中でも「歴史は私に無罪を宣告するであろう」というフレーズは何度も繰り返され、必ず「祖国」「死」「常に勝利する」という言葉でスピーチは締めくくられた。

私は青春と言われる時期のほとんどをキューバで過ごした。なんの因果か七年近くもキューバで学ぶことになった。キューバ留学がなければ、私はポル・ポト政権やその後の社会主義政権下で溜めこんだ社会や政治に対する怒りをどこかで爆発させ、あるいは政府軍の兵士となって前線に行っていたかもしれない。「訳注・ポル・ポト政権崩壊後、カンボジアはベトナム支援型の社会主義政権となった。一方タイ国境に拠点を構えたポル・ポト派らの樹立した連合政府は国連での議席を保持したため、この二政府との間で約十四年間に戦が続いた」。キューバは私に、ポル・ポト時代によって失った過去を取り戻し、現在と未来を与えて

くれた。

外国人用語学学校ペピート・メンドーサで初めてスペイン語を教えてくれたレイナルド先生は厳しく優しく一生懸命教えてくれた。喜怒哀楽の表情を作ったり、ギターやアコーディオンをかき鳴らす仕草で踊りながら「麗しきキューバ」を歌ってくれた。アラビア語、ロシア語、中国語の言語物真似がうまかった。子どもっぽい私たちに業を煮やして「同志諸君！」と机を叩き、女子学生たちが泣き出すと慌てて慰めることが何度もあった。行列して食べたコッペリアのアイスクリーム、専門家研修で来ていたカンボジア人に連れていってもらった憧れのナイトクラブ、トロピカーナ。頑張ればナショナルチーム・レベルになれると口説かれて、ボクシングや重量挙げのクラブに入って放課後、猛烈に練習した。地元ピナル・デル・リオの野球チーム、ベゲロスの試合には熱くなった。テレビでパルマス・イ・カーニヤスの音楽番組になると、キューバ人の同級生は辟易したように席を立ってしまったが、私はカンボジアのアイヤ「訳注・男女二人が掛け合いで歌ったり漫才をしたりするカンボジアの伝統芸能」を思い出してホームシックになった。ピナル・デル・リオの寮のルームメイトと一緒に論文執筆をしたアルフレッドは、普通のキューバ人とは違って女、酒、音楽、ダ

ンスには一切興味を示さず、FORTRANやBASICなどのプログラミング言語に夢中だった。自宅に招いてくれて、そこで食べたお母さん特製のポークステーキと青バナナ・チップスは絶品だった。

——そしてこの民族はもつとよい運命を享受するのに相応しい

一九七五年四月から四年弱続いた極端な共産主義を標榜するポル・ポト政権は、一九七九年一月に崩壊した。ポル・ポト政権下では、以前、プノンペンで公務員だった父をはじめとして家族全員が地方に送られ、農作業に従事させられた。一九七九年一月の時点で私は十六歳になっていた。父は私が体も小さく畑仕事も人並みにできないことを心配し、その年の稲刈りが終わった一〇月、プノンペンの商業省で勤務となっていた私の姉の元を送って、すでに学校が再開されていたプノンペンで勉強を続けさせることにした。

ポル・ポト時代のために四年間勉強から離れていたのに、学力に相応しい下の学年に入りたかったが、そこはすでに定員がいっぱいになっていたので、仕方なく中学三年生に入った。編入試験はなかったが、机と椅子を一脚ずつ学校に寄付することが条件だった。周囲には、ポル・ポト政権崩壊後すぐにプノンペンに戻って生活基盤を築いた人や、親が政府高官だったり、海外の援助団体に働いていたり、あるいはタイとの密輸で儲けていた人など、物資も豊かで裕福な生活をしている人が多かった。

た。私のように地方から来た者は少数で、学校に着て行くものもなくクラスメートのようにこっそり英語塾に行く余裕もなくて（当時は敵性語とされていたが、援助団体に働けば高収入が得られるし西側諸国にいつか脱出できたときに有利だとされていて誰もが習いたがっていた）、いろんな意味でついていくのが大変だった。

苦学した末、その年の中学卒業試験に合格し、高校に進学した。大学に行けなくてもせめて専門学校で学びたいと思った。ポル・ポト政権崩壊直後のカンボジア国内の高等教育は医学部、薬学部が再開されていたが、さらに勉強を続けるには、経済的な理由から私には留学する道しかなかった。

留学先は人気のある順に三つに分けられていた。一番は、東ドイツ、ハンガリー、チェコスロヴァキア。プノンペンにある映画館やベトナム兵営で毎晩のように上演されていた色彩美しい東ドイツのコメディ映画『道化師フェルディナンド』に影響されて、誰もが東ドイツに憧れを抱いていた。二番目がソ連。だがモスクワにある「いい大学」や「いいコース」は党幹部の子弟が選ばれていた。三番目のポーランド、ブルガリア、モスクワから遠く離れたソ連の中央アジアの地域、キューバ、インド、ベトナムは、「お偉いさん」に縁故のない者が行くところだった。キューバはアジアの国じゃないだけ「まし」、でもラテンアメリカだから遅れている、という評価だった。

ある日、学校で「来週、ミグ戦闘機パイロット志願者の選抜のために、ベトナム軍医による身体検査がある」という案内があった。翌週の月曜日、同学年の男子は全員が身体検査に参加した。体格に自信のある生徒は先頭に並んだ。小柄な私は列の

後ろについた。並んで順番を待っている間にも、虫歯のある者は失格になる、などさまざまな憶測が飛び交い、私はあと少しで自分の番というところで、列から外れた。

ソ連留学には、大学（高校卒業資格取得者用）、専門学校（中学卒業資格取得者用）、職業訓練学校（中学校修了者用）の三つのレベルがあった。ほかの国も同様だと思い、ソ連のほか、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ハンガリーに応募書類を提出した。書類審査だけだったので、学校の近くにあった高等教育局の掲示板を毎日見に行った。最悪、ソ連には受かるだろうと思っていた。夥しい数の留學生が次々と送られていたからだ。だが全部落ちた。合格した人は数学、物理の塾に行き、または家庭教師がいたりして、私とは比較にならないぐらい成績がよかったのかもしれない。私にはそんな経済的余裕はなかった。長期休暇のときには、田舎に戻って田んぼの手伝いをしなければならなかった。

絶望感でいっぱいになって帰途につこうとした時、今年度最後のチャンスだからキューバに申請しなさいと先生に言われた。私は気乗りしなかったが、申請書は出すことにした。一か月後、掲示板に合格者として名前が出ていた。たいして嬉しくもなかった。やっぱりキューバなんかには行きたくなかった。

成績の書類審査が通っても完全に合格というわけではなかった。留学するには、党を裏切らず、党の指示に従うことを強く誓約した書類を提出しなければならなかった。さらに身内に西側諸国、特にアメリカ在住者、あるいはタイ・カンボジア国境の難民キャンプにいるとわかった者は不合格となった「訳注・一九八〇年代、タイ・カンボジア国境の難民キャンプは反政府

派の拠点とみなされていた。ここを経てアメリカ、フランス、カナダ、オーストラリアなど第三国に定住したカンボジア人は二十三人に上る」。だが実際にはほとんどの者が、西側諸国になんらかの血縁者がいて、その事実を隠していた。たとえば私と一緒にキューバに行った者はみな、到着した途端に、アメリカにいる親戚にドルを送ってくれと手紙を書いていた。私もご多分に漏れず、カナダの親戚に手紙を出した。彼女は見つからないようにカーボン紙に二〇ドルを包んで手紙には喜んで送ってくれた。その二〇ドルで、ピエール・カルダンの赤と白のスニーカーを一足買った。ボールを蹴ったり運動したりするのは憚られた。気取って出かけるときのためにとって置いた。

キューバ留学は理系分野のみで、第一期生は五人、私は第二期生（一九八一年―八二年度）となり、全部で二十五人（うち女性五人）だった。医学、獣医、化学、白砂糖産業、エックス線、食品化学、歯科技工、タバコ栽培分野を専門学校で決められた。私はなんとなく経済がいいなと思っていたのに、タバコ栽培を学ぶことを強制されて再び絶望感に満たされた。二十五人のうち学齢期相応の人は少なく、多くが既に省庁勤務している公務員で専門知識を増やすため、あるいは箔をつけたい党幹部の子弟だった。私は最年少だった。

留学すると決まっただけからは右往左往するばかりで何の準備もしなかったに等しい。キューバについて人に聞くと、気候はカンボジアに似ている、カンボジア人みたいにご飯と豚バラ肉を食べる（だが、脂と塩を混ぜたご飯とは思いませんでした）、黒人がたくさんいる、共産主義ではなく共和政国家だ（国名から勘違いしていたのだろう）、アメリカが生物兵器をキューバに散

布したためにさまざまな奇病が流行っている、という話まであった。

ボランティアでカンボジアに来ていたキューバ人医師と一緒に働いていた知り合いがいたので、キューバに持って行くべき物を聞いてもらったが、はつきりとした答えはなかった。私は姉の扶養家族になつていたので、姉が勤務先の商業省にズボンを仕立てるための布地を申請してくれた。ポール・ポト時代以前にプノンペンで流行っていた裾広がりのズボンを二本仕立てたが、履くことはなかった。キューバに行つてみてわかつたのだが、その形は流行遅れで、履いているのは「不良の黒人」ぐらいしかいなかった。ほかの親戚はハンガリー製のYシャツを二枚くれた。外国語の辞書は露露辞書か、露仏辞書以外は手に入りにくかつたので、持つて行く本はなかった。姉は豚肉のふりかけを大量に作つて粉ミルクの缶につめてくれた。父は漬物を売ること得たなけなしの金でタイ製のオリエントの時計を買つてくれた。鎖のバンドは腕回りよりも大きかつたが、もつたいなくて切ることができず、ぶかぶかのまま腕につけた。米ドルは空港の税関で没収されるという噂があつたが、母がベルトの内側に五〇ドル紙幣一枚をふたつにたたんで入れてくれた。それ以外に二チー「訳注：金の重量単位。一チーは三、七五グラム」の純金の指輪をはめた。これは後にキューバで東芝製ラジカセになつた。一緒に留学する人たちは、あたかも事前に必需品を知らされていたかのように金のネックレス、固形石鹸、粉石鹸などを用意していた。これらのものは、キューバでは米ドルがなければ購入できなかつたのだ。

プノンペンを出発したのはそれから半年後だつた。一九八二

年一月十八日午前中にポチェントン空港から出発するということだけが直前になつて知らされた。これまで何度も招集がかつたが、すべて空振りだつたので、半信半疑だつた。高等教育局の担当官は、学生の中から信頼できそうな年長者をリーダーに指名し、何事もリーダーの指示に従うように、特に經由地となる自由主義国で亡命を企てないこと、と何度も念を押し

た。乗り込んだエアフロートのツポレフ Tu-134には座席番号はついていなかった。家族との別れを惜しもうと、みんな右側の窓際に押し寄せた。留学生以外は、ほとんどがベトナム人兵だつた。シートベルトをするようにという指示もなかった。

キューバまで約一週間の旅だつた。空席が出るのを待つての出発だつたので、あらかじめ便名は決まっていなかった。外で宿泊することもあれば、機中泊もあつた。プノンペンを出てから、ホーチミン、ハノイ、ムンバイ、カラチ、タシュケント、モスクワ、フランクフルト、リスボンを経由してハバナに到着した。初めての飛行機は乗り物酔いで最悪だつた。タシュケントでは生まれて初めて雪を見て、モスクワでは極寒を経験した。

ハバナに到着したのは夜十一時だつた。バスが迎えに来て、三日間、健康診断のために専用病棟で留め置かれた。最初に食べた食事は、豚の脂と塩の混ぜご飯と黒豆粥だつた。まずくて食べられなかつた（これは後に私の大好物となるのだが）。この後、ハバナで六カ月スペイン語を学び、キューバ中部のカマグウェイで一年間、大学入学準備コースを学び、キューバ最西部に位置するピナール・デル・リオで五年間、修士課程修了まで学ぶ

ことになったのだった。私のようにキューバに留学したのは、一九八〇年から約一〇年ちよつとの間に、第一期生から第五期生まで合計約五〇人だった。

——我々はすべての若者に学んで欲しいという大きな望みを抱いている。若者が知識を身につけることは人間の共同体に欠かせないことであり、そしてそれはすべての青少年にとって聖なる権利なのだ

驚くことばかりだった。キューバは共産主義国で、なにもかも国営で、家族配給手帳に従ってものが売られていた。何をするにも行列しなければならなかった。大きな台風があつて大木が倒れることもあつた。ポル・ポト時代のように集団で食事をとらなければならなかった。夜の十二時までテレビ放送があり、また二十四時間、時報専用ラジオ局ラディオ・レロツホがあつた。

当時、ペピート・メンドーサはマナグア・ハバナというハバナ郊外にあり、軍事基地に隣接していた。ソ連人の軍事専門家が大量来ていて、キューバ人にミグ戦闘機の離着陸の訓練をしていた。「ソ連核研究所」の大きな看板もかかっていた。夕方暗くなつてくると、兵士の娯楽のためか、大型スピーカーからセンチメンタルな歌が流れてきて、歌詞の意味はわからなかったが、ひどく郷愁にかられた。あとで知つたのだがこれはラファエルの「イポクレシア」という歌だった。ほかにパブロ・ミラネスの「ヨランダ」を聞くと望郷の思いが募るのだっ

た。

キューバ人はカンボジア人のことを「カンボージャー」と呼んだ。外国人の少ないピナル・デル・リオでは、当初、「おい、中国人！」と陽気に呼びかけてきた。一生懸命説明して、中国人ではないことはわかつてもらったが、カンボジアはベトナムの一地方だと誤解された。一年もたつと、「カンボージャー」は独立国だとわかつてくれた。一月七日はカンボジアの「虐殺政権に対する勝利の日」という祝日のだが、毎年その日には、州の人民委員会が催し物を開いてカンボジア人留学生たちを招待してくれた。キューバ人の来賓に対して、勝利の日の意味についてスピーチをさせてくれ、さらにカンボジア人民共和国の国旗掲揚があり国歌が流れた。キューバの地でカンボジアの国歌を聞くと胸が震えた。このような催し物をキューバ政府は各国の留学生に対して行つていた。つまり毎週どこかの国や地域の祝日をやつていたことになる。

世界中から何十万人もの留学生が来ていた。千人単位で来ていたのは、エチオピア、アンゴラ、モザンビーク、サンディニスタ政権のニカラグア、ナミビアの南西アフリカ人民機構である。数百人であるのが、パレスチナ、シリア、アフガニスタン、イエメン、西サハラのポリサリオ戦線だった。次に多いのがエチオピア、モザンビーク、ナミビアだった。ニカラグア、アンゴラ、エチオピア、モザンビーク、ナミビアからは毎年小学生ぐらいの子どもから何千人も船で送られてきて、「青年の島」という島で学んでいた。アフリカのモロッコ、ガボン、チャド、リベリア、ケニヤ、タンザニアからは来ていなかった。中東のパレスチナからの留学生も千人単位でできていた。だが

一九八二年ごろにはイスラエルとの戦争に参加するために帰国していった。

ヨーロッパの東ブロックの国々のうち、ユーゴスラビアとルーマニアからは来ていなかった。政治の授業でこの二カ国は、修正主義者だと教えられた。ラテンアメリカからはホンジュラスからの留学生だけは見かけたことがなかった。カリブ諸島の国々からもすべて来ていた。その他、ラオス、ベトナム、ネパール、モンゴル、北朝鮮、イラン、イラク、アフガニスタン、オマーン、カタール、バーレーン、レバノンからも来ていた。インド、ミャンマー、バングラディシュ、パキスタンからは来ていなかった。アジアの中でもとくに、北朝鮮（学生は金日成バッチを付けていた）はアメリカに断固反対している、また「ホーおじさん」に代表されるベトナムはアメリカに勝利した国ということで、キューバでは高く評価されていた。

アンゴラ、シリア、レバノン、カタール、バーレーン、ザンビアからの留学生は自国の潤沢な奨学金を受けていた。ザンビアからの留学生は月一〇米ドルもらっている、といっていた。医学部の学生の多くは富裕層の子弟だった。イラクからの女子学生は寮には住まず、自家用車で学校に来ていた。

大使館の意向でカンボジア人学生には許されていなかったが、アンゴラ、ニカラグア、モザンビークの留学生はそれぞれの学生協会で活発に政治活動をしていた。アンゴラ人は国旗を模した赤と黒のユニフォームを着て、コントラ・ニカラグアやエルサルバドル政府を支持するアメリカ政府、あるいはアンゴラ、ナミビア、モザンビーク、ジンバブエを侵略した南アフリカのような帝国主義政府に抵抗を表明するために、ポスターを

貼ったり、ダンスや歌のある政治集会を開いていた。

ハバナでの寮は民族ごとに部屋割りしてあったが、カマグウェイでの寮は、一部屋十五メートル四方のところ三十人から四十人ぐらいが民族に関係なく詰め込まれた。東ヨーロッパからの学生は寮には入っていないかった。男子寮と女子寮はきっちり分けてあった。二段ベッドがずらりと並び、上段の住人は必ず、パンツだの靴下だのをぶらぶらと下げて干した。人下着に囲まれて寝るなんて運勢が悪くなる、とカンボジア人は先を争って上段を寝床にした。

留学生同士のいざこざは四六時中だった。サンタ・ルシア島出身の学生がカンボジア人女子学生をじろじろ見た、というだけでカンボジア人男子学生と殴り合いになった。ラオス人学生はナイジェリア人学生にビンの破片で刺され重症を負った。学生数で競っていたエチオピアとアンゴラの凄まじい喧嘩は日常風景と化していた。イスラム教を順守していたアフガニスタンの男子学生は、同じくアフガニスタンの女子学生が他国の男性を見たといつて、彼女たちを殴った。ラテンアメリカから来た学生は奨学金が支給されると、酒を飲んで夜中に騒いでいた。だが思想、政治のことで喧嘩になることはなかった。喧嘩になれば警察が飛んできたし、なによりキューバではそういうことではがみ合うような雰囲気はなかったのだ。

——我々の中に、ラテンアメリカの人々の中に、そして世界中に数万人ものチェがいる

キューバで学び始めてしばらくすると、地方の大学に進学していた第一期生リーダーを務める先輩が、今のままでは専門学校には入れず、中学卒業資格を持つていても、それが不要ない職業訓練学校にしか進めないから、キューバ政府に要望を出した方がいいと教えてくれた。この先輩はすでに商業省に勤めていて、カンボジアには妻子を残してきていた。とても温厚で頼りになる、キューバにいるカンボジア人留学生全員にとつてのリーダーだった。カンボジアの祝日ごとに留学生は大使館に招集され、あれこれと説教された。この機会を逃さず、先輩は学生たちの窮乏を汲み取って、いろんな要望を大使館に対して出してくれた。

キューバはソ連とは異なり、大学か職業訓練学校の二つしか進学を選択肢がなかった。カンボジア政府は、言葉の壁もあつたのだろうが、キューバの教育システムやカリキュラムを精査せず、専門学校への進学希望者は、すべて職業訓練校に進むことをキューバ政府に申請し、決定していた。私たちは先輩のアドバイスに従って、第三期生とともに、大学進学するチャンスを与えてくれるよう、カンボジア大使館に要望を出し、キューバの先生たちにも相談した。キューバの高等教育局はそれに対して理解を示した。黙っていかなかったのがカンボジア大使館である。カンボジアを出発する前からカンボジア政府が決定したことだ、と一步も譲らなかつた。キューバ政府がカンボジア大使館に意見したのか、結局、大学進学を希望するカンボジア人留学生たちは、高校卒業試験と同等と認められる理系科目の試験を受験できることになった。もちろん「お上」が決めた通りに職業訓練校に行く学生もいたし、受験しても不合格となった

学生もいた。

私は幸運なことに合格し、大学に進学できることになった。ここでまた問題になったのが、専門分野を変更しなければならなくなつたことだつた。大学ではエックス線とタバコ栽培を扱っているところがなかつたのである。私は小さい頃からなんとなく憧れていた経済に変更希望を出した。一週間後、カンボジア大使館から留学生は呼び集められ、党の指導に従えない輩が大勢いると叱責された。私は名指しではなかつたが、ソン・サン〔訳注：一九五〇—六〇年代に国立銀行頭取を務め、一九八〇年代はポル・ポト派、シハヌーク派とともにタイ国境で三派連合政府を主導していた一人〕になりたいやつまでいる！ と恫喝された。私は「党の意向」で、農業に専攻を変えることになった。その後、親切な先輩は、「カンボジアの友好国、社会主義国においてカンボジア人学生たちにデモを起こすよう扇動した首謀者」としてカンボジアに強制送還された。プノンペンの空港に降り立った途端、手錠をかけられ、護送車に乗せられて、政治犯として三年間投獄された。拷問も受けたという。キューバにいた私たちはその噂を聞いておろおろするばかりだつた。言論統制されていたカンボジアでも、大事件として巷の話題になつていたらしい。先輩は出獄後、商業省に戻つたが、若くして亡くなつた。

——我々の運動、我々の抵抗は勝利するまで突き進むのだ

大学に入ると、キューバ人は外国語として英語を学び、留

学生はスペイン語を学んだ。語学学校ではホセ・マルティの『黄金時代』を少し習っていたが、大学に入ると「グアンタナメラ」の入っている『素朴な詩』[訳注・ホセ・マルティの作品。ここに所収されている詩を元に、後に曲をつけたグアンタメラ(グアンタナモの娘)はキューバの国民的歌謡となった]も暗唱した。ヘルトウルーデイス・ゴメス・デ・アベリャネーダ[訳注・一八一四―一八三七。キューバ生まれで後にスペインに移住した女性作家]の「出発のとき」も習った。ノスタルジックな表現がカンボジア人の琴線に触れる内容だった。キューバの歴史やソ連の十一月革命、社会主義や資本主義の経済についても学んだ。

キューバ人学生も留学生も誰しもが学ばなければならないのが、社会主義政治関係の科目だった。演習形式になっていて一クラス平均十五人から二〇人だった。そしてこれは必ず及第点を取らなければならなかった。でなければ自動的に退学となった。カンボジア人留学生にとつては最も難しい科目だった。一年目は哲学一般と弁証法的唯物論、二年目は資本主義経済と社会主義経済、三年目は科学的社会主義だった。たとえばマルサスの人口論についてマルクス・レーニン主義から批判する。語彙や言葉が難しかったが、まじめに授業を受ける、課題をこなす、ということだけでカンボジア人学生は全員合格だった。キューバでは明確に西側諸国を批判していたわけではなかった。アメリカだけが批判対象となっていた。「アメリカは武器を売るために、小さな国々にちよっかいを出し、世界に不安定を起させようとする帝国主義の首領であり、最も人種差別をする国であり、最も犯罪が多い国で、権力に固執する国である」

と教えられた。

全国の一一般の映画館でハリウッド映画も普通に上映されていた。内容がキューバ政府や社会主義に過度に反対している作品、たとえばチャック・ノリス主演の『地獄のコマンドー』やシスベスター・スタローンの『ランボー』は上映禁止だった。だがこれらの作品も批判対象として大学内で上映された。視聴してからデイスカッションの時間がとられた。ここで描かれる英雄性はどうか、一人で敵地に乗り込むことは可能なか、などを討論し、最後には「ノー・ヤンキー!」「傲慢!」「尊大!」と言うのがお決まりだった。

アメリカからキューバに対する攻撃があつたときには「ミーンティング」が開催され、学生は寮や教室に集まってアメリカ批判をした。キューバ領空内をアメリカの偵察機が飛んだ、国内で人権侵害を犯しているとしてキューバ政府を非難した、カリブ海のグレナダ諸島やパナマのようなキューバの友好国を攻撃した、などである。特に一九八三年のグレナダ侵攻のときは大集会が開かれた。「革命万歳」「打倒、帝国主義」「フィデル、指示をしてくれ。祖国か死か。我らは勝利する!」がスローガンだった。グレナダ出身のエリックとは一緒にスペイン語を勉強した仲だったが、彼はマルクス主義的なニュー・ジューエル運動[訳注・グレナダの政治家モーリス・ビショップ(一九四四―一九八三)が提唱した政治運動]に熱心で、スローガンを連呼していた。

キューバ人がやたらと自国の革命が素晴らしいと自慢するのに辟易することもあった。私は自由主義国のことを知らなかったし、社会主義について毎日学ばなければならなかったの

で、嫌気がさしていたこともあったと思う。どんなに「アメリカは悪」と教えられても、これは社会主義のプロパガンダに過ぎないと思っていた。

三年生になるとキューバ人学生は男女とも全員、二年間に渡って週に一度、陸軍士官学校で勉強しなければならなかった。大学卒業時には修士号だけではなく、中尉の階級も約束されるのだ。キューバ政府は外国人留学生も参加させていた。私も最初の一か月は、格好いいと思つて隊列を組んで行進する訓練に参加した。ニカラグア、ナミビア、アンゴラは内戦状態だったので、そこからの留学生は強制参加になっていた。だがキューバ政府が留学生を軍の訓練に強制参加させている、とアメリカが非難し始めると、全員参加ではなくなった。スポーツの練習に参加すると毎回の食事が二人分配給された。でも軍事練習に参加しても食料補給はなかった。空腹には耐えられず、そのうち私も参加するのをやめてしまった。

——私たちはどんなことがあつても有言実行する人間なのだ

カンボジア人留学生はみな、基本的にキューバ政府から提供される衣食住だけで生活していた。大学に在学する留学生のお小遣いは一か月六〇ペソだった。市内バスに乗ったり、ほんの少しおやつを買ったりするだけなら十分だった。でも「ポル・ポト時代明け」の成長期の男子には全く足りず、いつもひもじかった。

学生は全員、一日三回、学食で一緒に食事をとることになつ

ていた。仕切りのついたプレートにすべてがのつていた。朝は、パン一切れ、バターが親指ほどの大きさ、紅茶が一杯、牛乳一杯、ときどきヨーグルトがついた。毎日変わるのはパンの種類だけで、丸いパンだったりちよつと細長いパンだったりした。昼食と夕食は、ヨーグルトか牛乳が一杯、脂と塩を混ぜた白米、あるいは黒豆ご飯、フィデオという干麺の碎いたものが入ったスープか黒豆粥、肉の味はするけれど不味い、太いソーセージを厚切りしたようなモルタデーヤか大きな魚のフライ、そしてマッシュポテトだった。デザートには、牛乳粥、グレープフルーツの皮の砂糖漬け、あるいはクリームがサンドしてあるケーキ一切れが交互に出た。

寮の寝室では煮炊きは禁止されていた。カンボジア人学生はアイロンのコイル部分を外し、建築現場から拾ってきた手頃な石材を丸く切り、電気コンロを作った。それでお湯を沸かしてハンガリー製のインスタントスープにフィデオを入れるか、卵を焼いて、空腹をしのいだ。食べ物の匂いがほかの学生や舎監にも伝わって、再三注意された。

コロツケ、コングリ「訳注：米、赤インゲン豆、豚肉、香辛料を混ぜて炊いた赤飯のような豆ご飯」、エンパナーダ「訳注：牛か鶏の挽き肉をつめて小麦粉の生地を折り重ねて揚げたもの」、トルティージャ「訳注：オムレッツ風の卵料理」など食べ物に関する単語はあつという間に覚えた。ハム、コルドン・ブルー「訳注：チーズを肉で包んで油で揚げるか焼いた料理」、コクテル・デ・オステイオネス「訳注：高級酒肴の一つで、ライムを絞った牡蠣」などは、名前を覚えても本物にお目にかかるチャンスはなかった。

町に飲食店はたくさんあつたが、料理の品数がどこも二、三

種類しかなかった。スパゲティの店は茹でたスパゲティにチーズとケチャップをかけただけだった。ピザも同様だった。フライドチキンで有名な店ピオピオは、一日に一、二回しか販売せず、一時間行列した挙句売り切れということもあった。カフェでは、コーヒーと炭酸水を少し甘くしたマルタという清涼飲料水しかなかった。メニューにあるコーラやビールは滅多になく、それも一日に一時間だけしか売っていなかった。

公式レートでは一米ドルは一ペソ相当だったが、闇では五から八ペソだった。ペソは配給手帳があつてこそ使えるものだった。配給用の店で自由に買うことができる食料品は野菜、砂糖、フィデオ、卵だけだったが、どれも非常に安価だった。配給手帳に規定されている価格の約五倍の料金を払えばパン、米、肉や輸入品などを大きな自由売りのスーパーで買うことができた。東ヨーロッパ諸国製で自由に買える日用品や食料品は国産の二、三倍はした。

新年度最初の日曜日になると、大学の留学生担当者の引率のもとに、地方都市ごとに一軒だけある留学生用の商店へ、衣料品を支給してもらいに行つた。みな自分の気に入る生地や色、サイズを見繕うのにたつぷり午前中はかかった。支給されたのは長袖シャツ（中国製、あるいは東ヨーロッパ製）一枚、半袖シャツ（国産）二枚、パンツ（国産）二枚、長ズボン（国産）一本、革靴（国産）一足、運動靴（ルーマニア製）一足だった。だが新品を身に着けても、カンボジア人はまったくいけてなかった。サイズが合わなかったのだ。それでも支給品だけで羞恥、心ととも次々の一年をやり過ぎすのだった。

一般のキューバ人はパン、米、肉、脂、牛乳、石鹸、歯磨き粉、

衣服、靴などの配給があつた。栄養的に問題もなく、識字率は良く、高い教育が受けられ、誰もが無料で医療サービスを受けられた。大がかりな手術でも一銭もかからなかった。観光もスポーツも芸術も入場料は無料だった。学校内で、サルサ、ダンス、ソン、ソン・モントウーノ〔訳注：いずれもキューバのダンス。〕 ミュージックの「ジヤンル」のオーケストラのコンサートや、週末の夜にダンスパーティーがあつた。

グレープフルーツの皮、グアバ、パイナップル、マンゴーなどの砂糖漬けは、素材の味がしつかりして、とてもおいしかった。でもそれらはみな外貨を稼ぐための輸出商品だったので、ペソでは売っていなかった。同じように、大きな海老、亀の卵、蟹など海産物も輸出だった。それで漁師たちは一般のキューバ人よりもかなりいい暮らしをしていた。漁師たちは船ごとアメリカに行つてしまいかねなかつたので、政府から食糧、住居、酒などを特別に配給されていた。

公の場所や学校にはどこでも運動場があつた。大きな運動場で行われるボクシングをよく見に行つた。カンボジア人には馴染みのない野球も、キューバ人の友人が熱心に教えてくれて、おもしろさがわかるようになった。ナショナルチームの選手たちはほとんどが黒人だった。選手たちも漁師たちと同じだった。生活は豊かでない家に住んでいた。

キューバ人の友人に誘われて、いろんな地方にある彼らの実家に遊びにいった。キューバ人の家は地面に直接建てられた五〇m²ぐらいの広さで、部屋数も多くなくドアで仕切られていなかった。たとえばバスルームは布のカーテンがドアの代わりだった。しょっちゅう近所の人を招き入れ、おしゃべりしながら

ら飲み食いしていた。とくに重要な祝日である七月二十六日の革命記念日、メーデー、一月一日の解放記念日には、家で豚の丸焼きを茹でたキャツサバと一緒に食べ、豚の皮の揚げたのをおつまみにビールを飲む。老いも若きも愛想がよく、親切で、あけつびろげだった。プライベートというものがなく、他人の生活にどんどん口出しする。政府に対する非難を禁止する法律はなかったが、批判はよろしくないという雰囲気だった。政府がすべて教育も健康も保障してくれていたのだから。カトリックだと表明する人は一割程度しかいなかったと思う。だがカトリック教会の扉はいつも開かれていて、そこでお祈りしている人もいた。私はキューバ人に自分は仏教徒だと言ってみたが、特に興味もなさそうだった。キューバ人は社会主義以外の何も信じていないように見えた。

キューバ人はさまざまな味、匂い、色、美しさに飢えていた。必要なものはすべて揃っているが、どれも種類しかない上に古臭くて時代遅れだった。ソ連製品が幅をきかせていた。政府高官や外交官用の車ヴォルガ、セダン車のラーダ（私は自動車免許を取る時に乗った）とモスクヴィッチ、四輪駆動のラーダ・ニーヴァ。どれもものすごくガソリンを喰った。ゼニートのカメラ（闇で二十五米ドルだった）、セレーナのラジオ、ポルホツト（パリヨート）の時計、「七十二%生臭さ石鹸」（消臭効果のためか原料臭かったのでカンボジア人はそう呼んでいた）、ルーミア製のクリスタルという歯磨き粉。

しかしそんなものにみんな興味はなかった。欲しいのは「店」で売っている西側製品だった。そこでは「フラ」とか「緑色」という隠語で呼ばれる米ドルでしか買えない物でできなかった。大規

模な「店」はホテル・ハバナ・リブレにあり、期間限定で一軒家が「店」になることもあった。でもそこで買える物できるのは、大使館関係者や外国人ビジネスマン、ドイツ、カナダ、スペインなどからの観光客だけで、一般のキューバ人や留学生は米ドルを所持することすら基本的には違反だった。私服警察官がいつも「店」のまわりをうろついていた。

それでもキューバの人々はなんとか西側製品を手に入れようとした。国民全員が公務員として約三〇〇ペソの月給をもらっていたし配給物資の値段はただ同然だったので、ペソは有り余っていた。そこで目をつけたのが留学生だった。留学生は自国の大使館員、外交団、技術研修者など「店」に自由に出入りできる人たちと接触するチャンスがある。だから西側諸国製品を手に入れるには留学生に頼るのが手っ取り早かった。留学生はキューバ人の要求に応じて積極的にこうした「外国人」の案内役や通訳を買って出た。その見返りとして「店」に同行させてもらい、彼らに品物を代わりに買ってもらう。キューバ人は留学生からそれらの品物を高値で買う。こうして「取り引き」と呼ばれる違法ビジネスが成り立っていた。ジーンズ、Tシャツ、ポロシャツ、スニーカーが人気商品で、ジーンズやスニーカーは二〇ドルから三〇ドルだった。カンボジア人留学生の約二割は「取り引き」専従者になりつつあった。商売に忙しくて勉強はそっちのけになっていった。そのうちキューバを訪れるカンボジア政府関係者に頼んで人気商品（多くはカンボジアにいる親戚たちが「あらゆる手段」を使って手に入れたタイ製品だった）を持ってきてもらい、売りさばくようになった。とうとう学校当局の目に余るようになり、国に強制送還された者も出た。

——永遠の栄光は私たちを革命者にし、革命者は私たちに自由、正義、名誉と勝利をもたらす

修士論文は、キューバ人のアルフレッドと共著で「コンピュータプログラムを使ったオレンジ栽培会社の農業用トラクターのメンテナンス計画作成について」を執筆した。研究過程で非常に感銘をうけたのは、キューバでは人間を休ませるために機械を使用する、ということだった。キューバではトラクターをはじめとしてありとあらゆる種類のソ連製農業機械があった。カンボジアを発する前に書いた「帰国後はカンボジアで農業会社を設立できるよう勉強に励みます」という誓約書に沿うテーマだった。

一九八八年一〇月に帰国した。親類たちは船便で着くさまざまな「おみやげ」、つまりカンボジア国内で高値で売れる物資を待ち望んでいた。たとえば中国製の派手な柄の毛布（カンボジアの婚礼で敷物にした）や注射器（キューバで品薄になるほど留学生によって買い占められた）だった。私が送ったのはずしりと重い本ばかりだったので歓迎されなかった。『歴史は私に無罪を宣告するであろう』はカンボジアでも手に入るだろうと思いい、持って帰ってこなかったのだが、二度とその本を見ることはなかった。国内では農業大学がすでに再開されていて、そこでエリート街道を進んできた国内組は留学組を好意的に迎えはしなかった。私は農芸局農業試験場に配属された。小さな耕耘機一台で二ヘクタールの土地で野菜栽培をすることになっ

た。キューバの友人たちに手紙を送ってみたが、カンボジアの郵便事情が悪かったのか返事は来なかった。東西冷戦が終わりに近づいていて、カンボジアも少しずつ社会主義体制から離れていった。ポル・ポト政権崩壊直後から一九九〇年代初めまで東側ブロックの国々に派遣された少なくとも数万人のカンボジア人は、帰国後、その知識と技術をどこにしまいこんでしまったのだろうか。

世界の大国は今年戦後七〇周年だといって、さまざまな記念行事を開催している。ローマ教皇フランシスコがキューバでフィデルと会い、またオバマがラウルと握手をした。翻ってカンボジアを見てみると、今年はまだ内戦が終わって二〇数年にすぎない。きっとキューバで出会った留学生たちの母国も戦後間もないか、あるいは紛争中かもしれない。アフリカ、中東、ラテンアメリカの国や地域のニュースを見るたびに、彼らの顔を思い浮かべ、彼らの生きてきた歴史を思い、大国の思惑に義憤を感じるのだ。

ウンサー・マロム

一九六三年、カンボジアのプノンペンに生まれる。一九七五年から一九七九年のポル・ポト政権を生き延び、一九八二年一月から一九八八年一〇月までキューバ共和国給費留学生として、カマグエイ総合大学予科、ピナール・デル・リオ総合大学で野菜生産を学ぶ。現在、本学非常勤講師。

ここに記されているのは一九八〇年代のキューバを伝える極めて貴重な記録で、記録文学（スペイン語で「クロニカ Cronica」）と言つてよいと思う。しかもカンボジア人によつてスペイン語で経験されたことがカンボジア語で書かれ、日本語に翻訳されたものである。

フィデル・カストロによつて一九五九年に樹立された革命政府は、六〇年代の米国との国交断絶や「キューバ危機」、七〇年代の「パデューリヤ事件」などの知識人粛清によるキューバ版「文化大革命」などを経て、より強固な体制を築いていく。その頂点にあるのが八〇年の「マリエル港事件」で、このとき政府は、十万人以上の亡命者（フィデルによれば「蛆虫」）を放出し、島内の反乱分子を一掃する。作家のレイナルド・アレナスがキューバを出たのもこのときのことである。しかしそれからわずか十年後、ソ連の崩壊によつて「平和時の特別期間」に突入し、キューバは経済政策を徐々に自由化しながら生き延びる道を選ぶ。その「恩恵」によつて島を訪れた外国人は少なくなく、私もその一人である。以降、革命政権はあの手この手で島の内部の不満を解消しながら、四半世紀をかけて、二〇一五年七月、米国と正式に国交を回復する。したがつて八〇年代のキューバというのは、大量亡命のマリエルと社会主義圏の崩壊に挟まれた十年、つまり、広く西側に開かれる直前の、革命理念を純粹に追求した最後の時代にあたる。その時期をマロム氏は首都ハバナ、古都カマグウェイ、タバコ生産の中心地ピナル・デル・リオで送っている。

各章の冒頭に置かれているのはフィデルの演説の一節だが、この配置を見て思い出したのは、ガルシア・マルケスのエッセイ（「フィデル・カストロ、語りの魔術」）である。この時代、フィデルが長い演説をはじめると、キューバ人はラジオなどで演説を聞きながら通勤したり仕事をしたりして一日を送つたというが、まさにそのときの雰囲気ダイレクトに伝えるものだ。キューバの学生生活という点、おそらく自身の経験に基づいて学生寮の生活を書いているセネル・パスの作品（たとえば『毒とチョコレート』）が思い浮かぶ。実際、石鹼のきつい匂いはこの時代の思い出としてよく聞いたことがある。といって、本クロニカで生き生きと描写されているような、各国からの留学生を巻き込んだ騒動は読んだことがない。

実を言うと、キューバにおける東側ブロックの文化交流について最初に関心をもつたのは、ベトナムに行つたときにタクシーのなかで、本文に言及もある「グアンタナメラ」が流れたときだった。その後、キューバの映像作家（サンティアゴ・アルバレス）によるベトナムを舞台にしたドキュメンタリー作品を見たりして（調べたところ、彼の作品がプノンペン映画祭で賞をもらったこともあるようだ）、いまはキューバの文化機関「カサ・デ・ラス・アメリカス」の文芸誌を拾い読みしながら、七〇年代から八〇年代の雰囲気をつかもうとしている。キューバ研究のなかでもソ連時代に焦点を当てるのは近年とくに盛んになっており、マロム氏のクロニカを日本語で読めることに少なからずの驚きと感慨を覚える。貴重な経験を文章にしてくださつたウンサー・マロム氏、翻訳者の岡田知子氏に深く感謝申し上げます。